

光明団創立十五周年を迎う

追憶

謹んで全光明団員に捧げます。

仏天の擁護と、社会的要求と、血盟結束の同胞同志の奮闘精進によって、着々と歩み続けて来た我等の光明団は、ここに創立十五周年記念大会を迎えました。

光明団創立十五周年！

私は今、ペンを持ったまま、二十分三十分、ただ茫然として紙面を凝視しつつ、はてなく続く過去の追憶にひたっていました。

大正八年一月、光明団は小さい二葉をきりました。飯室という一農村において。そして五ヶ年間、私は唯々苦しい歩みをつづけました。

濟世軍の真田増丸師を招いて五周年大会が挙行された時、五百戸挙村一致、未曾有の盛会でありました。だが、これが光明団の一大転機となつて、一農村から投げ出されて、広島市に出ました。それから後、私には進むことだけが許されて、休むことも、停まることも許されませんでした。裸一貫、背水の陣を布いて戦いつづけました。

それから何時しかに十ヶ年経過しました。いよく十二月一日より十五周年大会です。

苦しかった雨の旦、淋しかった風の夕、一敗地にまみれて、すでに立つ気力すらないかと思われた苦闘の日、一切が行きづまって、もうこの日限りと思つた時、そうした記憶だけが、潮のように私の感情を打ちます。

その時、その日、私にはどうしても、歩むより外、進むより外、許してくれないものの声がありました。内と外、その一切の苦を忍んで、歩みきるより外ない所に、一筋の道は開かれました。油断すれば、この幼木は、根から亡ぼされそうです。

その時、私に必要なものは、唯冷たい理性でした。強い意志でした。今日、私はこの苦境にこそ真に感謝せずにはいられません。み仏の教えの真実、それが身をもつて知らして頂けたからであります。

感謝

私は今十五年間において、私の歩みの上に導きと力と援助とを与えて下さった多くの菩薩大士の深厚なる恩徳に対して、衷心から、満腔の感謝を捧げないではいられません。

多くの先輩師友の御導きを受けました。多くの同胞の献身的な奉仕を頂戴しました。もし今日までに、少しでも文化のために尽くすことが出来たとすれば、それは唯この多くの同胞の熱誠奉仕の賜であります。

更に新に

玄に十五周年記念大会を挙ぐるに至つて、我等の使命はいよいよ明願であります。我等はこの大会をもつて、光明団の劃時代的な意義を見出します。我等はここに陣営を立直して、一大飛躍をなすべき絶好の機会たらしめようとしています。

世は今、世界的不安動揺の唯中に何ものかを求めています。あらゆる社会が何ものかを求めています。その時、我等は、大乘菩薩道の大旗をおしたて、世の迷妄の真唯中に進軍します。

而して血盟結束、一死団結の同士こそ、この猛運動の中堅であります。我等今、この同心一体の同士と共に天の一角をにらみ、大地の上にはつきりと立っています。

本部成る

特に同胞に申上げたいことは、いよく我等の本部が新築されることあります。

義侠、柳川富太郎棟梁は、金に目をかけず、ソロバンを持たず献身、本部建築の任に当っています。彼は見る所、一介の好々爺、しかし人格高潔、清廉大胆、稀に見る人物であります。六間に十三間の総二階をわずか四千五百円で仕上げようとしています。彼と相見ること再三回、しかも、一切を挙げて彼に委ねました。

我々は久しく、借家の不便に全くつながれて、十分に手足をのばすことが出来なかつたのです。しかし新しい本部は、我等の歩みの上に、劃時代的なものを与えることを断言致します。

同胞よ。私は、本部建設にあたつて、同胞のよせられた好意に対して、衷心の感謝を捧げます。それと共に、更に全団員の献身的御奉仕をお願い致します。

帰り来れこの聖会に

同胞よ！ 帰れ！ 我等の家に、この大会は決してお祭り騒ぎではない。依然として求道精進のなされる聖会である。

万難を排し、万障を差し繰つて、必ずこの大会に帰つて、共に如来の新たなる生命にふれ、使命に生きる人となろう。

本部全員は、日夜その仕度に忙殺されつつ、同胞の来会する日を待っています。